

本院と大分県歯科医師会が がん患者の口腔管理で連携

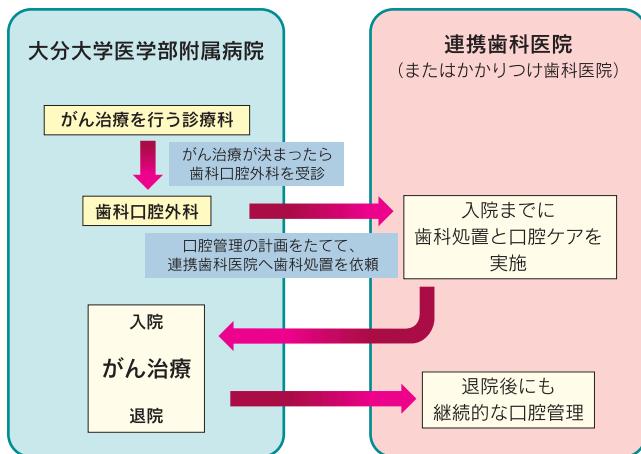
がん治療の際に口腔衛生状態を良好に保つことにより治療に伴う合併症を防ぎ、がん治療の効率化を図ろうという活動が、全国の都道府県がん拠点病院と地元の歯科医師会の間で始まっています。大分県でも、5月16日に本院と大分県歯科医師会が大分県がん患者医科歯科医療連携事業の調印を行いました。

具体的には、本院でがん治療を受けることが決まつたら、まず歯科口腔外科外来で口腔内診察を受けていただきます。担当歯科医師が口腔管理計画をたてて、本事業に登録している連携歯科医院への依頼状を作ります。患者さんはがん治療のための入院までに連携歯科医院で歯周病やう蝕の治療などを受け、口腔衛生状態を改善しておきます。さらにがん治療を終えて退院した後にも、継続した口腔管理を受けることができます。

がん治療は主に手術、抗がん剤、放射線によって行われますが、口腔衛生状態が悪いと手術の後に肺炎などの感染症を起こしやすく、また抗がん剤治療や頭頸部領域の放射線治療では重度の口内炎などのさまざまな口腔合併症を生じます。このような合併症のために、患者さんは苦痛を受けるだけでなく、がん治療が予定どおりに進まないといったことにもなります。がん治療開始までに歯科処置を済ませ、口腔ケアにより口腔衛生状態を改善しておくことは、これらの合併症を予防するために有効です。



大分大学医学部附属病院 野口病院長（右）と
大分県歯科医師会 長尾会長（左）による調印式の様子



大分県がん治療医科歯科医療連携の流れ

本院ではすでに歯科口腔外科外来で、主に入院患者さんを対象とした全身麻酔手術前や骨髄移植前などに口腔ケアを行っていますが、これからは本院でがん治療を受けるすべての患者さんを対象に口腔管理を行い、がん治療がスムーズに進むことを目指します。

お問い合わせ：本院歯科口腔外科外来

（文責 歯科口腔外科 河野憲司）

教授就任挨拶

呼吸器・乳腺外科学講座

杉 尾 賢 二

平成25年3月より総合外科学第2講座教授に就任し、4月からは外科の臓器別再編に伴い、呼吸器・乳腺外科学講座となり、呼吸器外科と乳腺外科を担当することになりました。



呼吸器外科と乳腺外科の疾患の主体は、肺癌や乳癌を始めとする悪性腫瘍性疾患です。肺癌死者数は、平成23年には70,293人となり平成10年から癌による死亡原因の第一位となっています。一方、乳癌は、女性の癌の中で最も多く罹患する癌です。肺癌、乳癌ともに、今後も増加すると予測されています。これらの癌をいかに早く発見し適切な治療を提供していくかが私たちの責務であります。私は、これまで九州大学、産業医科大学、九州がんセンターで研鑽を積み、質の高い最新の癌診療を実践してきました。大分大学におきましてもこれまで以上に、手術を含めた最良・最新の癌医療を提供することに努め、大分の医療に貢献していきたいと思っています。

肺癌においては、癌の根治性を落とすことなく、低侵襲の内視鏡手術を積極的に推進していきます。また、進行した肺癌に対しても手術と化学療法や放射線治療を組み合わせた集学的治療により治癒率の向上をめざします。現代は、癌治療に遺伝子診断が欠かせない時代になってきています。遺伝子診断によって適応が決まる分子標的治療を、手術前後の治療に加味していく最新の治療を進めています。これらの点につきましては、セカンドオピニオン外来を充実させ、皆様の疑問に答えられるようにしていきます。研究としても癌の原因究明と新たな治療法の確立に力を入れていきます。

本学の役割は、これからの大分および日本の癌医療を担う人材の育成であり、大分大学の出身者が大分の医療を担うべく、そして、患者さんの気持ちを理解できる人間性の豊かな外科医を育成していきたいと思います。現在、大分県内には呼吸器外科専門医は13名、乳腺専門医は12名いますが、充足しておりません。これから一層、大分県内の病院との連携を深め、外科医をめざす医師が十分に修練できるようにサポートしていくつもりです。大分の医療を担う外科医を育成し、さらには大分から世界へ羽ばたく外科医を輩出することが目標です。

大分の皆様が、大分で最良の癌医療が受けられるように最善を尽くしていきますので、宜しくお願い致します。

教授就任挨拶

消化器内科学講座

村 上 和 成



平成25年5月1日より消化器内科学講座の教授を拝命いたしましたので、ご挨拶申し上げます。消化器内科といえば、多くの方が食欲がない、お腹が痛いなど、消化器に関連する症状を経験したことがあると思います。消化器内科を臓器別に分けてみると上部消化管、下部消化管、肝・胆・脾に大別されますが、本院ではどの分野でも最新で最良の診療が受けられます。

最近、消化器疾患の診断・治療には著しい進歩がみられます。たとえば、消化器がんの治療は、これまで開腹手術や開胸手術が主流でしたが、近年は拡大内視鏡などで細かいところまで診断し、身体に優しい内視鏡的治療が大いに進歩しています。本院では、胃や大腸のポリープ・粘膜下腫瘍や早期がんに対し超音波内視鏡などを駆使して確定診断を行っています。また、治療としては、ポリペクトミーや粘膜切除術（EMR）、内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）など負担の少ない治療を積極的に施行しています。また、食道が狭くなり、食事が通らない食道アカラシアに対する経口内視鏡的筋層切開術（POEM）も行っています。これまで「暗黒の臓器」と言われ、診断治療が困難であった小腸の病気に対しても、カプセル内視鏡やバルーン内視鏡を使って診断・治療を行っています。また、肝細胞がんの診断や内科的治療も著しく進歩しており、さらに、C型肝炎治療も最新治療を積極的に取り入れています。胃がんや消化性潰瘍の治療はピロリ菌の除菌により大きな変化を見せており、最近増加傾向にあるクローン病や潰瘍性大腸炎の炎症性腸疾患に対しても新しい治療を行っています。当消化器内科では、臨床的また基礎的なデータとともに、内科、外科、放射線科などともタイアップし、専門的な検査、治療を行っています。なお、本院は日本消化器病学会の認定施設および日本消化器内視鏡学会の指導施設として認定されています。患者さんに細やかで苦痛がなく、かつ大学病院として、より高度な診療を実践できるよう心掛けています。

大分大学医学部の発展、郷土の医療の充実のためにさらに努力したいと思いますので、皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

教授就任挨拶

内分泌代謝・膠原病・腎臓内科学講座

柴田 洋 孝



平成25年6月1日より、内分泌代謝・膠原病・腎臓内科学講座の教授に就任しました柴田洋孝と申します。大分大学医学部の組織再編に基づいて、講座の名称が、「総合内科学第一講座」から「内分泌代謝・膠原病・腎臓内科学講座」に変わり新しくスタートしました。主に扱う診療領域は、従来と同様に「内分泌糖尿病内科」、「膠原病内科」、「腎臓内科」の3つの領域の病気の診療を扱います。今まで扱っていた循環器内科、消化器内科は、各自独立して「循環器内科・臨床検査診断学講座」、「消化器内科学講座」となりました。

私は、慶應義塾大学大学院医学研究科博士課程を修了し、腎臓・内分泌・代謝内科に入局し、医師になって25年間を慶應義塾大学医学部にて診療、教育、研究に従事してまいりました。慶應義塾の起源は、1858年に福澤諭吉が開校した学校で、幼少期を過ごした大分県中津市に福澤旧居が残っており、私にとって大分の地は深い縁を感じております。

私の主な専門領域は、内分泌疾患、副腎疾患、糖尿病、高血圧症です。日本人の4人に1人は高血圧で、脳卒中、心筋梗塞などの日本人の主な死因の発端は、高血圧症にあります。高血圧症は通常治ることはなく、生涯にわたり降圧薬の内服が必要です。しかし、高血圧症の約10%は、血圧を上昇させるアルドステロンが過剰に作られる原発性アルドステロン症などの二次性高血圧で、これらは治療により著明に改善し、「治る」こともあります。私は、慶應義塾大学病院の外来で、多くの高血圧症の診療と「治る」高血圧症の診療に従事してきました。高血圧症がある方は、糖尿病、肥満、不整脈、慢性腎臓病などの臓器合併症が多いです。また、高齢化に伴い慢性の炎症や自己免疫が原因となる関節リウマチなどの膠原病も増加しております。私は慶應義塾での経験を生かして、3つの診療グループの医師らと共に、わかりやすい説明を心がけて、患者の皆様自身に病気とその治療を理解していただく治療を目指していきます。そして、「ありふれた」、でも「放っておくと怖い」生活習慣病やメタボリック症候群の地域医療の活性化を行っていきたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

Hybrid（ハイブリッド）手術室稼動開始！！

今年4月本院に待望のHybrid手術室が完成しました。Hybridとは二つの異なるものを組み合わせ一つの目的を成すことをいいます。すなわち開腹、開胸手術も可能な手術室としての機能、かつ従来放射線部にしかなかった鮮明な画像を得られる血管造影室としての機能、この二つの機能をもった手術室がHybrid手術室です。そしてHybrid手術室ではHybrid治療が行われます。Hybrid治療とは外科的に血管、心臓を露出して血管吻合などの処置をしてかつ血管造影などカテーテル操作も行うというものです。具体的には大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術がそのHybrid治療にあたりますが、そのほか動脈閉塞症に対して血管バイパス術とカテーテル血管拡張術を同時に行う場合もあります。これまで移動型の血管造影装置を手術室に持ち込み行っていましたが、今回の固定式血管造影装置は最新式で解像度、操作性など格段に優れたものになっており、より細かい操作、正確な処置が可能になりました。本院では過去6年間に心臓血管外科、放射線科がチームを組み（これもHybridです！）ステントグラフト治療を九州随一の約500例行ってきました。Hybrid手術室ではさらにこれまでできなかった難易度の高いステントグラフト治療をより安全に行っていくことができます。

実は当初Hybrid手術室はもっと後での導入予定でした。それを前倒しして整備した一番の理由は、今年日本で認可が下りる「経カテーテル大動脈弁移植術」をいち早く本院で行えるようにするためです。これは大動脈弁が狭くなった患者さんで、胸を開けて心臓手術を受ける体力のない高齢者の方に、血管を通してカテーテルで人工弁を運んで植え付けるというもので、やっと日本でも行えるようになります。難しい手技ですのでHybrid手術室を完備していることなど厳しい施設基準が設けられていますが、本院はその基準をすでに満たしておりすぐにでも始められる体制となっております。是非ご期待ください。



（文責 心臓血管外科 宮本伸二）

シリーズ**病院再整備****【記念式典】**

新病棟は、昨年12月に完成し、竣工記念式典が4月12日に行われました。式典には大分県、文部科学省及び県内の医療機関等から約100名の出席があり、北野学長から「最先端の医療を提供できる施設にしていきたい」と挨拶がありました。



学長挨拶

【新病棟移転】

4月29日に新病棟への移転が行われました。移転にあたっては、東病棟に入院中の患者さんを新病棟へ事故のないよう安全に移動するため、医師・看護師を中心としたスタッフでチームを作り、事前のミーティング・リハーサルを行い、入念な準備を進めてきました。

移動日当日は、お見舞い・ご面会の時間を制限したり、入院中の患者さんは病室で待機をお願いしたり、大変なご不便をおかけしましたが、おかげさまで無事に東病棟の入院患者さんを新病棟へ移動することができました。



病棟移動の様子



ミーティングの様子

今後の病院の再整備は、東病棟の改修工事が7月から始まり、西病棟、中央診療棟の改修工事並びに外来棟の増築・改修工事が行われ、平成29年3月に完成する計画です。

病院再整備が完成するまでの間、患者さんには騒音・振動などでご迷惑をおかけいたしますが、引き続きご理解とご協力をよろしくお願いします。

(文責 病院再整備推進室)

シリーズ**サービス向上への取り組み**

駐車場整理員は、駐車場をスムーズにご利用いただけるよう目配り・気配り・心配りを整理員一人ひとりが心がけて業務にあたるようにしていますが、まだまだ「患者さんの声」で私どもの応対についてご指摘を受けております。その都度、ご指摘を真摯に受け止め、どのような対応が皆様にとって最善かを整理員全員で話し合いながら改善し対処しています。更に、年2回の警備業法で義務付けられている現任教育を行う際には「接遇マナー」についても取り組んでいます。

現在、病院再整備に伴い駐車場を利用される皆様にはご不便をおかけしております。お気づきの点がございましたら遠慮なく駐車場整理員にお声掛けください。今後ともご指摘、ご指導をよろしくお願いいたします。

(文責 仁心会)

**大分大学医学部附属病院**

〒879-5593 由布市挾間町医大ヶ丘1丁目1番地 TEL 097-549-4411(代)

大分大学医学部附属病院ホームページ <http://www.med.oita-u.ac.jp/hospital/index.html>

1号から53号までの「かけはし」は、医事相談窓口にありますので、遠慮なくお申し付け下さい。また、医学部附属病院ホームページからもご覧いただけます。

